

## 装束を通して能の心を伝える

中世日本研究所 モニカ・ベアーテ

初めて能を見ると、その豪華な能装束に日本人、外国人にかかわらず目を魅かれる人が多いに違いない。白木と松の絵だけの単純な能舞台に、ひときわ輝く能装束は、その役の性格、年齢、位や職業などを現し、舞台装置の代わりに曲全体の雰囲気や季節を描き表す。遠くからは、その色、素材、文様、風合いを楽しむ事が出来、近くから見るときには、能装束の微妙な表現に心ときめかすことが出来る。染織品として好まれたからか、19世紀以降、外国では多くの能装束コレクションがある。

しかし、能装束には文化、歴史的背景が反映されており、外国人に鑑賞はされても、どこまで理解されているのだろうか、と問いが残るのではないだろうか。言い換えると、能の表現（装束を含めて）は、どこまで普遍的な面を持っているのか、また、どの部分については文化の知識がないと解りづらく不透明であるのか。おそらく答えは人によりさまざまであろう。

本発表者は、2012年6月に Theater Nohgaku 主催による外国人のための Noh Costume Workshop を行った。1日目～3日目は能装束の織組織、技法、歴史的発展、色、文様、仕立ての組み合わせを学び、4日目には装束の着付け方法を学んだ。この Workshop を通じて、作り手、鑑賞人の観点からも、また、実際に能を舞う人の観点からも考察することができた。その成果について発表する。